

まあちやんの御看病

美 知 代

まあちやんは誰よりも誰よりも、お祖母さんが大好きです。

お祖母さんも、まあちやんが大お好きで、それはそれは、そのお愛がかりあそばす事と云つたら、眼の中へお入れになつても、些少もお痛くないかと思はれる位、お大事なお大事な御秘藏つ兒です。何時でしたか、お祖母さんが甚いお風を召して、久しくおよつて被在つたとき、まあちやんがお祖母さんのお枕元へお見舞に行きますと。

『まあちやんや、さ、お前お手々をお貸し。』
お祖母さんは瘦せ細つて、恐い程骨立つた御自分のお手をお出しになつて、『お祖母さんはね、今度と云ふ今度は、最うたすからしないで、これつきり死んで行くかもしれないよ。』と、しつかりまあちやんの

まあちやんの御看病

手を執つてお握りなさいました。
實際さう仰有つたお祖母さんのお顔色と云つたら、眞蒼で、今にも息が絶えさうに見えました。
まあちやんは悲しくなつて、何も云はないで、只、お祖母さんのお手を握り返へしました。が、どうにも悲しくて悲しくて堪りません。突然大きな聲を出して、わあ／＼泣き出しました。と、傍に御看病なすつて被在つた母様が、
『何ですぞまあちやん、お前そんな大きな聲を出して、赤ちやんぢやありませんか、さあ最うおやめなさいよ。』と仰有いました。ですけれ共、まあちやんは大好きなお祖母さんが、お死になさると思ふと、悲しくて悲しくて、どうしても泣きやめられせん。
『お祖母さん、後生、死な／＼で頂戴よう。』
とお祖母さんのお胸に顔を當て、泣きました。
『あ、よく云つてお呉れだ、だけ共ね、まあちやんや、お祖母さんが死んだら、母様の仰有る事をよくきいて、何でも御命令通りするんですよ。』
『え、だけ共縁よお祖母さん、死ぬなんて、死ぬな

「ただねえまあちゃん、若いものより一つでも年のいつたものの方が早く死ぬと、昔からちゃんとお定つてるですもの、それにお祖母さんはもう年が年だから……それよりかまあちゃんは、お祖母さんよりささい死ぬなんて、そんな悲しい事云はないで、何時迄も何時迄も長生して、立派なお嫁になつて、立派な母様になつて、お祖母さんのやうに白髪のお婆になつてからお死になさい、さうすると、お祖母さんは今死んで行つたつて、草葉の蔭から見えて居て、どんなに嬉しいかしれやしない。」

「嫌々、嫌々私、どうしたつて私、お祖母さんよりささい死ぬんだわ。」



(54)

と、最うちやんと昔から神様がお定めなすつてらつしやるんだもの、しようがないぢやないかね。」

「まあちゃん、神様がお定めなすつたと聞いて、全く落膽しちまひました。」

「しようがないのねえ。」

「ホツと吐息をついて、まあちゃんは暫く考へ込んで居ましたが、好い事を考へついたらと云つた風に、急に生々した調子で、

「ねえお祖母さん、私好い事考へついでよ、神様がお定めなすたらならしようがないけれど、今晚お祖母さんがお死になさるでせう、さうするとねえ、その翌日、まあちゃんも直ぐ死んで行けるやうに、さう云つて神様にお願ひして頂戴、ねえお祖母さん！」

「お祖母さんは御返事なさらないで、突然まあちゃんをお抱きしめました。」

「ねえお祖母さん、神様は悪い間違つた事でさへなさや、どんな事だつて大抵きいて被下るでせう、ねえ、だから屹度きいて下さるわねえ、ねえお祖母さん、今直ぐ御願ひしといて頂戴よう。」

まあちゃんの御看病

「まあちゃんはお祖母さんが、些少も御返事なさらないので、よう、ようと、お鼻をならして、頻りにお祖母さんのお胸に顔を押しつけました。ですけれど、お祖母さんは矢張り何も御返事なさいません。而してたい幾度も幾度も、まあちゃんを抱きしめ抱きしめ、しまひにはオイオイ聲を立て、お泣きになりました。まあちゃんも堪らなすつて泣きました。」

「そんなにお祖母さんがお大事なら、泣いてはかつり居ないで、まあちゃんもこれから、始終お傍で御看病させて頂くと好い。」

「え、私してよ、だつてこれ迄何もさせて下さらないですもの、私だつて、あんま位出来る事よ。」

「と大喜びです。而して其日からまあちゃんは、お祖母さんの御看病をする事になりました。」

「毎日朝起きると直ぐ、お祖母さんのおよつてらつしやる裏のお二階へ上つて、學校へ出掛ける其間際まで、ちつとも下へは降りません、夕方は夕方で、學校から歸つて来ますとも直ぐ、「お祖母さん、は？」つて屹度、お祖母さんの御容態をさくので」

(55)

す。そしてお傍につき切つて、お薬を差上げたり、おもゆを差上げたり、一生懸命御看病して、お祖母さんの御病氣が、一日も早くよくなりなますやうにと、始終心の中で神様にお祈りいたしました。そのせいですが、大變お悪かつたお祖母さんの御病氣も段々よくなりました。最うそんなに大騒ぎして、御看病しなくなつて、御自分で身のまはりの御自由もさくやうになりましたが、まあちやんは矢張り御傍につきつりです。

「お祖母さんが夜おてうづへ被入る時には、お前是非眼をさまして、おあかりをお見せ申してね、あぶなくないやうに、ようく氣をつけるんだよ。」
 母様から云ひつかつて、まあちやんは毎晩御隠居所に泊る事になりました。而してお祖母さんの御寢床のすぐ傍にやすみました。而して、毎晩あんまをして上げました、まあちやんの按摩は、なか／＼お上手なのです。
 「お祖母さん、私下手だから、些少もこたへないでせう。」

を、こたへないと悪いと思つて、小さなお指の先きに、グツと力を入れて、頻りにもみはぐそうとするのでした。

「ナニ、さうでもない、よく應へるよ、お前は中々上手だねえ、だけ共、お祖母さんは、もむよりか打つた方が好きだから、打つてお呉れな。」
 お祖母さんは何時でも斯う仰有るのです。で、まあちやんが一つ二つと數へて、片々のお腰からおみあしを百打ちますと、
 「最う此方は好いから、其代り序に今一方のあんよも打つて貰ひませうか。」と仰有つて、お祖母さんは寢返りをなさいます。

まあちやんが打ちにかゝりますと、お祖母さんは昔、御自分が奥女中をつとめて被在つた時代のお話だの、何だの、面白いお話を初めなさいます。まあちやんは話好きですから、一生懸命、それを伺つて居ますと、どうもお手々の方がお留守になつて、數へ違ひしさうで堪りません、丁度五十迄數へて來ますと、「オやお前四十でせう、五十だなんて、數へ間違ひおしおやないかい。」とお祖母さんが仰有います。

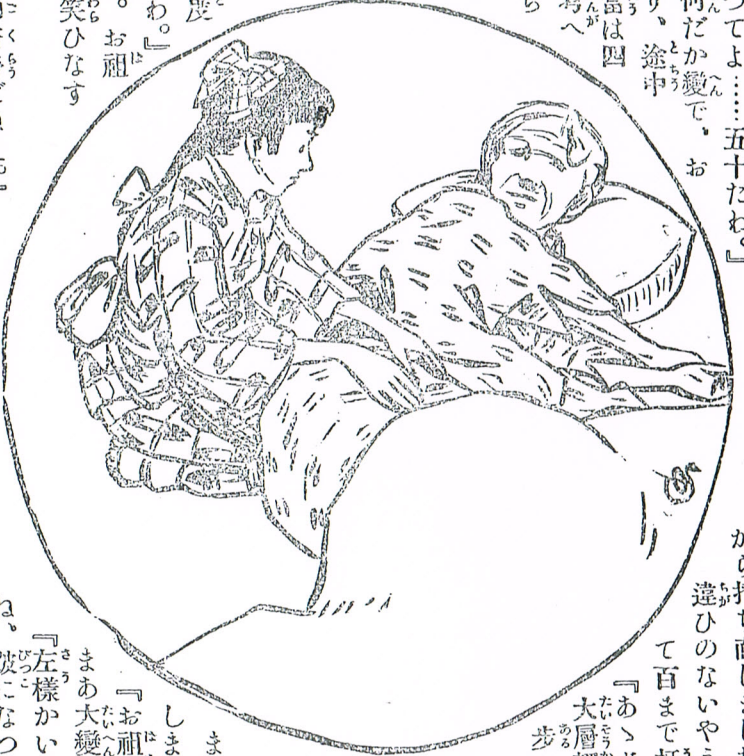
まあちやんは又、一つ二つと丁寧に數へて、初めから打ち直しました。而して今度は數へ間違ひのないやうに、一生懸命氣をつけて百まで打ちました。

「あゝどうも有り難う、お陰で大層軽くなりました、ドリヤ歩いて見ませうか。」

お歩きになるお祖母さんを見ますと、まあ如何でせう、思ひ掛けもない、跛でゐらつしやいます。

「アラお祖母さん！」
 まあちやんは全く驚ろいてしまひました。

「お祖母さん、お痛いでせう。まあ大變な跛だわ。」
 「左様かい、ナニ何處も痛かないが、ね、跛になつちや困りもんだねえ、甚



まあちやんの御看病

「アラ私五十だと思つてよ……五十だわ。」
 併しまあちやんも何だか變で、お祖母さんの仰有る通り、途中で數へ違ひして、本當は四十なのかもしれんと考へるのでした。ですからお祖母さんが、
 「さうかねえ、併しお祖母さんは四十のやうに思ふがねえ。」と仰有いますと、
 「そいぢやお祖母さん、私間違つたかも知れないから、今一度初めつから打ち直すわ。」と云つちまひました。お祖母さんはニコ／＼お笑ひなすつて、
 「さうかい、それは御苦勞だねえ。」

繪畫特別佳作



第四卷 第九號

い散かい。

「え、随分！如何なすつたんでせう。」

「まあちやんが伺ひますと。お祖母さんは一寸とお考へなすつて、『あゝさうだ、お前、先刻片々のあんよをお打ちの時、途中で敷へ間違つて、又初めつから打ち直したでせう。』

「え。」

「だもんだからお前、片々ばかり筋が延び過ぎたんだよ、争はれないもんだねえ。」

とお祖母さんは類りに御感心なさいます。

「まあ私如何したら……」

自分の落度からお祖母さんを躰にしちまつたと思つて、まあちやんは最う泣きさうになりました。ですけれ共お祖母さんは案外平氣で、

「ナニ心配おしの事は無い、それよりかお前早く直してお呉れなよ。」と譯ない事のやうに仰有います。

「え、だつてもお祖母さん、私どうしたら直るんだか、些少も解らないんですもの……」

「まあちやんは愈々困つてしまひました。『ナンノお前、譯ないぢやないか、片々のあんよへ

間違つた敷だけ打ち添へりや、それで好いんだよ、元々片々の筋がちつとばかり延び過ぎたんだからね。』

「まあ、さう！」

まあちやんは急に生々した様子で、一生懸命お祖母さんの敷がなほりますやうにと、神様にお祈りしながら、又一つ二つと打ち初めました。お祖母さんは何時までも黙つて被在るので、

「お祖母さん、まあだ。」

まあちやんは、又打ち過ぎはしないかと、心配で極りません。

「あゝ御苦勞様、もう好いでせう、ドリヤ歩いて見ませうかね。」と仰有つてお祖母さんはお立ちになりましたが、最う今度は些少も躰ぢやありませんでした。

「まあよかつた！」

まあちやんはやつと安心致しました。而して心の中、神様にお禮申しましたが、嬉しいやうな、悲しいやうな、何とも云へぬ涙が兩方の頬を傳つて、バラ／＼流れ落ちるのでした。(完)